詩集

濕地の火

新島榮治著

詩集

濕地の火

新島榮治著

東京
紅玉堂出版

新島榮治詩集

濕地の火

東京　紅玉堂書店

裝幀　村雲毅一氏
肖像　服部亮英氏

漫畫にしたる著者

新島榮治著

詩集

濕地の火

紅玉堂發行

宣　言

聞け――
社會の凡てのものよ、
俺を知るものも、識らぬものも、

俺は、社會の塵芥だ、
そして此の塵芥は、社會のありと、あらゆる處へ飛
　んで行くのだ

そして毒となり、

又、肥料となるのだ。

――一九二三、三、二――

新嶋榮治

序

とても讀めないほど拙い文字で書いたしどろもどろの原稿や、勞働問題や社會問題の書物などを薄汚ない風呂敷に包んだパン屋の職人が、雜司ケ谷の私の家へ飄然としてやつて來た。その職人先生、學問もなければ修養もないが、隨分苦勞をしたと見えて、自ら苦勞人を以て任じてゐる。私に向つて頻りに世間學を說き、社會問題を論ずる。そして私をやりこめたものだ、この勇敢なる職人が三年前の我が新島榮治だつた。パン屋の癖に袴を佩いたり、碌々文字も知らない癖に物を書いて一體何をするつもりかしらと思つて居るうちに、いつの間にか一人で偉くなつたから、不思議でならぬが、よく〳〵その三年間の彼の生活を見ると、ちつとも不思議ではないことになる。彼の心中には文筆勞働者として今日まではきつと立つて見せると云ふやうな野心と覺

悟とがあつた、ほかの人々が一つ食べるものを半分食べ、ほかの人々が一つする努力を二つしたのだ。どんな天才でも平凡なる勉強家には決勝點に行くと負ける。新島榮治は天才でも秀才でもないが、私の觀察によると、實に頭のいゝ平凡な奮闘家だ。こんな種類の人間に出逢つては何人と雖も敵ひつこない。彼は實に善良な性質をもつてゐる。私は彼が怒つたり罵つたり恨みがましいことを云ふのをついぞ見たことがない。彼はまた非常に熱情のある原始的な、禮儀作法の一つも心得ない無邪氣な粗野漢とも云へる。それだけ一面にはなか〳〵のヒュマニストで、人情家で餘計なことだと思はれるやうな他人の世話を燒きながら、自分は頻りに困つてゐる。日本の文士と云へば、書くものに依つては急に判斷が出來ないけれども、先づ大體は新島榮治とは正反對の特徴を持つて居ることで一般の人と區がつく。その仲間へ一人の異常な人間が割り込んで來た。面白いことではないか。しかし、彼はまだ〳〵勉強しなければならぬ。前途と希望とを確かに持つてゐる。今の調子で、し

つかり押して行つたら、ほかの人々にひけを取るやうな、生やさしい文士ではないことを讀者諸君に斷言し得る。

一九二三年、三月一日

大泉黑石

序

此頃佛蘭西では樂器などは人工的な邪魔ものだ、本當の樂器は手細工の加はらないものでなければならぬとて、肉聲のほかプリキ鑵を叩いたりビール瓶を打つ打けたり一發のピストルを合の手としたりする音樂が流行するさうだ、一寸眼先が變つてるので珍らしがり屋が集つて來るが物騒なので寄り附くものが段々減る、併し味つて見れば中々面白い所もあると譯識りは云ふ。

此の佛蘭西の新樂器を人間にしたのが我が新島榮治君だ、物騒な男のやうで少しは味もある。

この男今度詩集を出すといふ、詩のことは僕には皆目分らない、新島の詩のよしあしなどは無論分らない、分らないから詩はすゝめないが人間が面白いから賴まれもせぬに序文をかく。

人に序文を賴む樣な男ではないが、死んでも賴まぬと頑張る程の優し味の缺けた男でもない。柄にもない戀の歌などを臆面もなく並べるのでも分る。兎に角之を賣つて幾月かを食ひ繋がうと云ふのだから多少虛名を賣つてゐる僕の序文も幾分の補けにならうと思つて無理に書いて遣る。本屋のおやぢに喜ばれるのが少々癪のやうでもあるが、新島の息が幾らかのどやかにつければとは僕の切なる願である。

よく人の爲めに奔走する新島を饑死さし度くないと思ふ人は外にもあらう僕は彫琢を經ぬ荒削りの儘の「彼」を人間界の一標本として保在したく思ふ。疑ふ人は一度遇つて見て貰ひたい、來いと云つたら何時でも行くに違ひない遇つて見て成程と思はるゝ同感の士は「詩」の爲めにではなく「彼」の爲めにどうか一本を購はれんことを翼ふ。

大正十二年三月九日夜

彼の友人　吉野作造

序

△

『一寸法師のやうな新島の新宿の女郎に惚れられたといふ三角形の顏をおもひ出した』と、三月號の新興文學に尾崎士郎が書いてゐるがうまい形容詞だと思ふ。俺も初めて榮治の顏を見た時『ずゐぶん變つた面だな』と思つたが、幾度か逢つてゐるうちに何かかう無邪氣なたまらなく人を引きつける力を持つた顏になつて來た。こんな外面的な觀察が此の詩集に何の干係があるかと云ふ者もあらうが、決してさうでは無い。あの『荒つけづり』な顏のやうな感じは又榮治の性格、榮治の詩からも受ける感じなのだ。

△

とにかく榮治は俺の親しい友達のうちで一番變つた男である。汚れたカラーを平氣でつけて（朝日の新居格氏の言を藉りて云へば）『日本人には珍らしい顏』をしていつも黑い布の鞄を抱いてノコ〳〵やつて來る。さうして勝手な熱を吹いて歸つてしまふ。

△

榮治は全く變つた人間だ。一錢の錢を持つてゐなくても平氣で戀をしたり詩を作つたりしてゐる。さうして社會運動の戰線に立つて勇敢に闘つてゐる。

△

榮治とは幾度か一緒に飯を喰つた。榮治は酒も飲まず煙草も吸はない。然

も何時、何處でゞもつばを飛ばして論じ立てる。さうかと思ふと思ひ出したやうに例の鞄から人から貰つて來たらしいノートを摑み出して詩を書くのだ。さうして讀んで聽かせる。

△

榮治は全く憎くない男だ。おそらく誰にも好かれ誰にも可愛がられる男だらう。どんな忙しい時でも忙しいところへ平氣でやつて來て迷惑だと云ふ感じを榮治には決して持てない。

△

此の詩集が出版されるやうに世話をしてやつた俺は、亦彼の紹介で鼻を診察して貰ふためK大の附屬病院の醫師の坂口、西野、弘中、國屋、阿久津の諸君に紹介して貰つた。慶應の病院には榮治が問題を起した女が居る。然も

其の女に嫌はれたらしい。だが、其の爲に榮治は『戀の焰』や『傷口から迸り出る血』や、『必然音の響』や『涯下に巣喰ふ女』のやうな隨分いゝ詩を得てゐる。

△

榮治は此の詩集が澤山賣れて印税がうんと入つて來ても自分の喰ふに必要なもの以外は皆意義ある仕事に使ふに違ひない。酒を飲んだり女郎買ひをしたりしないところに彼の眞劍な主義者らしい俤がある。

△

一度だつて拘留もされず投獄をもされずにやれ社會詩人だの民衆詩人だの云つてゐる甘い奴等は葬り去るがよい。彼の先覺者づらが氣に喰はないではないか。

△

此の詩集の中にはくだらない詩もある。然し今の日本の詩人たちには絶對に眞似も出來ない深刻さを持つた詩も尠くない。加藤朝鳥が榮治の詩を『嵐の詩』だと評したさうだが適評だと思ふ。安價な感傷や、皮想な社會詩や貴族の玩具に似た象徴詩やくだらないプロの詩がはびこつてゐる此頃、榮治の詩集が世に出るのは痛快なことだ。眠つてゐる……行きつまつてゐる現詩壇に爆彈を投ずるやうな氣がする。

俺は喜んで此の詩集の賣子にならう。

大正十二年三月十二日

勝田香月

序の詩

秋田雨雀

人類は嘗つて神を創造した、
人類は嘗つて藝術を創造した、
人類は嘗つて化學を創造した、
人類は自分の創造したものゝ爲めに苦しんで居る。
人類は今すべてから裸體になるべき時だ。
見よ、お前の眼の下に何があるか？
見よ、あの廣い野を。
見よ、お前の過ぎ去つた醜い死骸を。
なぜ、お前は、そんなに肩をいからしたり、口を曲

げたりするのだ？

後生だから、そんなことをよしてくれ。そしてもつとお前の腕を擴げて呉れ……

お前は裸體にならうとして、古い着物を着てゐるのだ。

お前は、新らしい酒を古い皮囊に盛らうとしてゐるのだ。

人類は、――この國土に生れた人類は――たゞ一つの貧しい横笛だけしか與へられて居ない。

ほんとに貧しい一本の横笛だ――

何んの曲譜もついてゐない横笛だ――

だが、この貧しい横笛は、今、一つの音を立てゝ來た。

曲譜といふにはあまりに弱い、

音樂といふにはあまりに醜い、

だが、……

だが、然し、それは何かだ、何だ、呼吸だ、力だ、エネルギーだ、そして、撥ね反す力だ、湧き上る力だ……

それを何んと名づけていゝのか、已れは知らない、たゞあることだけは事實だ。

『プロレタリヤ』たゞといふ死語では言ひ表はせない『力』だ。

みんなその貧しい横笛を吹け……

みんなその貧しい横笛を吹け……

萬人に聲のあるといふこと位ゐ、力強い階級意識が

何處にある？
見よ、お前の眼の下に何があるか？
見よ、あの廣い野を、大陽に照らされてゐる廣い野
を。
見よ、お前の過ぎ去つた醜い死骸を。

（一、九二三、三、四）

序

序文を書けと强迫される故序文を書く。

私くしには元來詩は判らない。他人の仕事のよし惡しが本當にはわからない。それ故序文を書く資格を最小限に持つてゐるものは私だ。

然し私が序文を書くと書物がいくらか賣れるかも知れないといふことだ。そんな現象が實際あるか如何かは知らないが、兎に角强迫されるまゝに書く

私の讀んだところに依るとこの詩集の中には馬鹿らしい程下らないものがあるが、同時にお世辭ではなく素晴らしい本質的なものもある。詩として十分許さるべき直覺がある。私はそれを愛誦せずには居られない。作者が今後この方面にどれ程進轉するか、それを樂しみする。

三月四日誕生日の朝

有島武郎

自序

俺は世の中に生れて來たことが、俺自身の不幸であつた。俺は幸福であるなどゝは微塵を思はない。俺は生れながらの反逆兒だ、俺の親父とお袋が、×の結果が俺といふ塊だ、俺の兩親は誰にも斷らないで俺をまとめて置きながら、俺の發育などは如何でもいゝように思つて居たらしい。それだから俺は生れない先から、俺が生れることを兩親やその周圍の人々が否定してゐたのでも解る。

然し生物の本能は俺を嫌や應なしに惡流の中に投げ出した。俺の兩親は、俺が生れないから二人は仇敵のやうになつて、その渦中に俺を生れさせただから俺は不遇だなんて呑氣な言葉で過去の俺の生活史の表現は出來ないのだ。俺は食ふや食はずの中に尋常二年と少し學校の庭で遊んだ。それから十

才の時から子守奉公で拳骨と冷飯とで暮した。それからの俺は現在に至るまで職業を變へること百回に近い程であつた。だから空腹や野宿には慣れ過ぎる程馴れなければならなかつた。職業の數々は別に斷る迄もなく、一切の想像は讀者の判斷に任せる。

最近何んの氣まぐれからか詩を書いて見た。俺は元より詩の形式も知らなければ、文藝の何ものなるかは解し得ないけれど、俺は書きたいから書いた迄だ。それが今度本屋から出版されるのだ。それについて本屋は有名の人に序文を書いて貰へといふのだ、俺は嫌だと思つたけれど又仕方がないと思つたから、兎に角、秋田、大泉、有島、の諸氏に賴んだら喜んで書いて呉れた。それから、吉野作造氏から無理矢理に序文をたゝきつけられたのでそれも使ふことにした。

又有島氏は喜んで强迫されたことを斷つて置く。

友人の勝田香月といふ男が俺の詩集を出版することに非常に盡力して呉れ

たので、そのしるしに彼にも所謂名士並に序文を書いて貰つた、何は兎もあれ前記諸氏に御禮をいふ。

一、九二三、三、一〇夜

市外落合村下落合九〇三

空屋のやうな中で

著　者

詩集「濕地の火」目次

飛び行く種子……一
人間と動物……三
飢えて眠つて……四
顏の裝飾……五
噂……六
破船……七
月と梅と鶯……八
理想郷……九

甘い言葉が……一〇
甘い酒……一一
インキ壺……一二
鐵道工夫……一三
夢……一四
解け出した顔……一五
東京の道路……一六
からみ合つて……一七
蛇の舞踏……一八
休まない腦髓……二〇

無題……二一
昔の人……二二
一日……二三
一……二五
悶え……二六
散歩……二七
鼻血……二八
B……二九
欲求の一致……三一
憎むは愛するから……三二

戀は憂欝が快活か……三四
女の夢……三七
八朔の柿……四〇
俺の姿の川流れ……四一
體が地につかない……四六
求めても求めても……四八
淺い春……四九
汽笛……五一
東京郊外……五三
愛の代償……五五

椿の花……五八
汗をかいた瞳……五九
雪降りの跡……六一
囁き……六三
愛の價値……六四
愛の戸惑ひ……六五
高殿から見下したら……六七
迷へる鳩……六九
戀の果實……七一
濕地の火……七二

題なし……八六
潜む力……八七
焔……八八
凡てを欲するものに……八九
自由に惱む……九〇
亂舞する心……一〇
俺が會つた時……一一
傷口から迸り出る……一一三
山の精……一一三
蠡蟒……一一三

寢は寢ても……一二四
秋……一一五
陽盛り……一二六
飢餓と貯金……一二七
霧の中から我れを呼ぶ乙女……一二八
冬の夕日……一二二
薔薇の花……一二四
戀の焔……一二六
斷崖……一二一
裸體……一二六

俺の處へ來るならば……一五七
ものを言ひかけたは……一五九
空腹と肉の香……一六〇
ぼんやりした罪……一六四
必然の音響……一六六
涯下に巣喰ふ女……一六八

詩集

濕地の火

飛び行く種子

踏みつけられても、
踏みつけられても、枯れないたんぽゝ、
踏みつけられても、踏みつけられても、枯れないたんぽゝ、
踏みつけられながら、
ありとあらゆる處へ飛んで行く、
そして其處へ新らしいたんぽゝを蒔き散らすのだ。
踏みつけられても、踏みつけられても新らしい種蒔きのたんぽゝ。

人間と動物

甘つたるい戀が俺に抱きついて、
蛙を捕へた蛇のやうに、血を吸ひ始めた
驚いて俺が振り返つて見たら姿はなかつた。

臍肭臍は交尾期と出產期に人間の餌食になる。
人間は戀のために脊せ細る、戀のために生命を捨てる。
戀を捷ち得て苦惱の淵を廻る。
人間の女は孔雀の羽を時借りして男を追ひ廻す。
極樂鳥は羽が伸びれば人間に殺される。

飢えて眠つて

腹がふくれた二杯、三杯、十杯、
鰻飯の食ひ過ぎで、便所の獨專、
腹が痛い、きりきり腹が痛い。
驚いて見れば煎餅布團にべつたりと、
起ちあがる勇氣はこけた。
金がない、
絶食が十五日續いた、
腹がきり〳〵鳴つて居る。

顏の裝飾

電車に乘つたら、顏の裝飾の四つの眼が、
新聞紙の上で躍つて居た。
鳩の目と二十日鼠が遊んでゐた。
若い女。
老紳士。

電車の待合で、小さい口がキヤラメルの倉庫になつた。
幾つもの眼が現實逃避の瞑默にふけつて居る。
馳け出した電車の中に。

噂

Nが死んだつて、涙を流さね、……馬鹿、
友達が死ねば必つと泣くことにや決定つて居やしね。

深さと時間が涙を出さねんだ。

破船

沈默を破つた破船の夢、
外骨の魂がうよ〳〵してゐる。
干しばつた蚯蚓の舞踏、
飢えた鴉が三疋、
命默の祈禱に余念がない、
漆を流した、晝の疲勞れ、
歡樂を外に。

月と梅と鶯

多情を孕んだ梅の花が、
寒風を抱擁しながら、月の寢床を伸べてゐる。
鶯が笑つて居た、
ホーホケケキヨー——
薺(なづな)は、明日の仕度に忙しがつてゐる。

理想郷

半歳だつて、
蛇や蛙じやあるまいし、馬鹿にするない。
斯う見えたつて十五日か、二十日で、
おぢやんだ。

一切が、飢餓の二字で解決だ。

待つて居る。理想郷が百年先に、
一寸考へて見てからだ。

甘い言葉が

甘つたるい言葉が、
俺を誘き出し、
寒中氷の中に、
空風の吹き晒す中に、雪が降つても。

夏の災天に、
焼け砂の上を驅け廻らさせ、
水さへ呉れないで、
素裸の儘。

甘い酒

甘つたるい酒に醉つぱらつて、
俺の頬つぺたが、道に落こつて居た。
拾つて來るのを忘れて居たら、
後から來た人に、
踏みつけられて、
泥だらけになつた、
あんまり泥がつき過ぎたから、
その儘放つて置いた。

インキ壺

インキ壺が飛び出した。
喧嘩が始つた、仲直り、
ラブ、
線路を人間の血で洗つた、
海を淺くした、
山に枯木を增やした、
爆彈が飛んだ、
レボリウシオンの綱がかゝつた。
炬達の中で眠つて居た。

鐵道工夫

幾つもの頭と、
二倍の瞳、
銅金色の顏面の持ち主、」
手に持つた、
鶴嘴……「テコ」
手をあげた、
エンヤラヤノヤ……
エンヤラヤノヤ……
必靜(ちつ)して、動く鐵道線路。

夢

空腹が御馳走　持ち來たし、
俺の一番好きな煮しめを、山盛り、幾皿もく、
電燈は薄朧の光を反射させ、

煮えたぎつた鐵瓶の湯氣、
亂雜の呼吸、く枕元の渦、
淡い夢から醒めた……今の淋しさ。

解け出した顏

二三日前の雪降りで、
赤くかたまつた、
顏と顏、
今日は溫つかいので、……
解け出した。
顏と顏。

東京の道路

洋服男、
靴が沈んだ、……しかめつ面、

赤い女の下駄が、
浮いた、
又かい、
猿が擾ぎ出した。

からみ合つて

起きる、起きると、
口丈け叫んで、朝寢する男、

寢る〳〵と、
啼きながら、
夜更かす……女、
からみ合つて團子になつた。

蛇の舞踏

食に飢えた、
青蛇と白蛇が、
嚙み合ひ、嚙み合ひからみ合つて。
血みどろの焔をあげた。

黑蛇と赤蛇が、
身體の細る迄、からみ合つて、
赤い焔をあげた。
性に飢えた、

青蛇と白蛇、
黑蛇と赤蛇、
死、死、死、死。

休まない腦髓

直感の響きは、
俺の心臓を眠りに導いた、
錯覺を起して飛び上つた……
睾丸の位地、
青蛙が、
蛇の卵を孕んだ夢を、
夕の壽しは甘かつた、
食つても〳〵、腹がふくれなかつた。
今日で三日三晩何もお用聞きは來なかつた。

無題

律道の歎き、
錯覺の正調、
人語を忘れた馬の驚き、
曇天に星が苦り切つてゐる。
地下に蛙が小便して居る。

昔の人

振り拂へ振り拂つては、玉露を、
芝根に宿る玉露を、
振り拂つては一足を、
暗を徹して蟲の聲を、
琴の調べを、笛の音と、
心を吹いた、源の何某、
月も涙を流したに違ひない、

一日

女の胸が道端にころがつてゐる、」
俺を撲りやがつた、……
拳骨と一緒に、
馬糞の嗅ひ、
風がお早うつといつて、言葉をかけて通り過ぎた。
しかめ面をしてゐるから日が暮れた、」
俺の顔が、

三つ四つ、
氷の中に泳いで居る。

一

俺の首つ玉へ、
蛇が二疋、
俺の肩開墾しろ、
十年丈が十本、

頬ぺたが落こつてゐる、
車の轍の跡に、
二つ三つ、
半カケのもある。

悶え

俺の頭の隅で、
金槌が壊れた、
腐敗りかゝつた、心臓の役目、」

塞の河原へ頭が落つこつた。
富士の山より高く、
布團の上に、

餅屋の店、
賣れ殘つた菖蒲團子が一皿。

散歩

懐しい、いとしい、憂しい戀は俺を抱擁しなかつた。

壞れた蛇籠が抱きついた。
岩の下を水は潜入る、

俺の血は河原に干してあつた。

家へ歸つて來て見たら、
床の間に……
ぼつねんと座つて居た。

鼻血

眼醒めて、……
胸の底を掻きむしつたら、
心臓が……
吐切れ……吐切れに生きて居た。
頭の上に、……
龍脳が置いてあつた。

黒い鼻血が、
垢染みた敷布を色揚げした。

B

俺が寝て居ると、
深い眠りから揺り起こした。
幻影、
音もなく消え、

俺に寝汗をびつしより。
肩迄浸した。

高殿から……底迄。
突き落して、

白い煙さへ、
殘さなかつた。
幻影、……

俺が訪ねたら留守だつた。

欲求の一致

今日お前が來いといふから來た。

お前が欲しがるからこれは買つて來たのだ。

俺が今日來たのも、お前が欲しがるものを買つて來てやつたのも、お前のためではなかつたのだ。

俺の滿足が、
お前の欲求と一致したからだ。

憎むは愛するから

俺を憎むものは、俺を愛するものだ、
憎まず、怒らず、愛せざるものは、俺に戀する資格なきものだ。
資格なきに、戀さうとするのが多くの人の常だ。
戀するならば戀する先きに、我れと相手を凝視めよ。
然して後に愛せよ。

愛する時は忘我的に凡ての技巧を廢せよ。
技巧なく自我を放れて進めば、そこに眞實の自己が見出され、盡きぬ歡喜は待つてゐる。

然して此の歡喜に活くるものだけが、戀の勝利者である。

此の戀の勝利者にだけ、無限に戀を生むことが出來る。

戀に醉はず、戀に惑はず、戀に迷はず冷やかならず、
靜かに靜かに、
戀の坂道を辿るものだけが、戀の幸福を知り、戀の幸福に活くることが出來るのだ。

戀は憂鬱か快活か

戀は俺を憂鬱に導き、失望の淵に沈ませる、
然して絶望より希望の「ショック」を投げつけて、
チョロ〳〵と姿を隱す。

又歡喜の中に彷はせ、時々沈鬱を見舞はせる。
又或時は、自己を盲目にし、他人を暗く冷めたく、
且つ淋しく視る。
然して風の微動ぎを怒り、水の流れの「リズム」に
身を浮ばせ安靜の眠りに入らしむ。

黑い瞳を灰色に輝かせ、紅い唇に鈍色の粉飾をさせ、
心臟に大砲の響きを誘ふ。
時折りは殆んど無意識的に頭の毛を搔きむしらせる
道を歩いて居る時にも、突然起ち止まらせ、
然して行人に無意識に言葉をかけて驚かせる。
重要の用事を忘れさせ、自暴自棄を誘發し、微笑ま
せ、
然してその力の行使を强要する。
殊更に子供のやうに泣かせ、子供のやうに笑はせ、

子供のやうに怒らせ、躍り狂はせ、自らの不幸を
歎かせ他人に鞭打つことを喜ばせる。

然して戀は、無限界の境地を單明にし、牢獄を至る
處に作り、

自然界の有情を漾はせ、獻欷きより花の美を發見さ
せ、

俺の魂に身體に漆を流して、その破目から光輝と苦
惱を呼び出して眠りに入らしむ。

女の夢

病院の一室に、
戀の古傷を抱いて、語る人もなく、寢た時も醒めた
時も、災陽のやうに、風に吹かれて居る炎陽のや
うに、

ペンを働かせながらも、時ならぬ雷鳴は耳を驚かせ、
稲妻は瞳と胸を刺す、
然して後は必ず暴風雨は襲ひ來たり一切のものを破
壞する。

晴れた夜の水仙のやうな、白衣姿を輝かせながら、

慣れた手は活動寫眞の「フイルム」のやうに、包帶を手術患者の傷口に押當てゝ居る時も、時折り深い息をはづませねばならぬ。

被手術者の傷口を見る時にも、自分の戀の古傷が痛み出し、包帶を運ぶ手も時時遲れ勝ちになる。

燃え殘りの戀の焔は、チョイ〳〵頭を擡たげる。

被手術者の赤く沁んだ血が、黑づんで病室に家路に

その呻き聲と一緒に姿を消した頃、又燃え揚がる

戀の古傷。

同性の宿舍に、幾夜も〳〵人知れず、

聲と涙を呑み、儚ない幻影に睡眠の鍵を奪はれ、

昨年の今日を忍び泣いて、淡い淡い、夢の跡を、

今更ながら辿れど歸らず、辿れど歸らず。

薫咲く春の胡蝶の姿に思ひを馳せては、蛇の鎌首の

やうに、擡たげては倒れ、擡たげては倒れ、根氣

は盡き果て、

一夜の睡眠りも安らかならぬ。

八朔の柿

レターペーパは、……飛んだ、」
揺ぎ出した、……女。

八朔の柿。

男猿が待つてゐる。

俺の姿の川流れ

あんまり淋しいので、散歩に出たら、
人が一ぱい立つて居た。
傍へ行つて見たら誰も居なくなつた。
一人で立つて居ると、

幾つも幾つも、首が行儀よく並んでゐた。
鐵道の枕木と同じやうに、
口を「パクパク」動かして居た。
誰か聲を起てた、唱歌を、俺の作つた唱歌を、
燃え揚がるやうに謳つて居た。

俺が先生になつて一生懸命に謳つて居ると。
ポカツと音がしたので氣をつけて見ると、
何處の者か俺の頭を撲つた、傍に線路工夫が、
衝突した自轉車の、リームの様な歪んだ顏で俺を怒
鳴りつけた。

馳け出したら河の端へ來た。
澄み切つた綺麗の水が川を造つて居た。
河上から何か流れて來たので暫く見て居ると、

炭俵が二俵躍つて流れて來た。
それが泳ぐやうに流れて來た。
川の小波に揉まれ揉まれて、

俺がぼんやりして見て居たら、
俺の眼の前に流れて來た。
俺の前に來た時、それは炭俵ではなかつた、炭俵と
思つて居たのは、俺の姿によく似た人間の溺死體
なのであつた。

俺がよく見ればよく見る程それが俺の姿にそつくり
だ、
その溺死體は川端に立つて居る俺を呼びかけた、大
きな聲で、こんなことを言つた。

飢えた、飢えた、
女に飢えた、食に飢えた、

生物一切の欲求に飢えた、何時迄待つて居ても滿たすことは出來ないから、

俺は思ひ切つて川に飛び込んだ。

今は氣樂だ、お前も早く來いと呼びかけられた時、

俺は何んだか怖しくなつた。

不思議に堪えられなかつた。

暫く默つてそれをみつめて居たが、寒さ氣がしてならなくなつた、頭痛がして來た。

身體が自然と慄烈して來た、どんなに力んでも止まらない、頭は益々痛い、ガンガンする。

眼が見えなくなつて來た、眼が見えなくなつた、足が地につかなかつた。

川流れの俺の姿は益々俺を呼ぶ、激しく呼びかける、激怒するやうな聲が俺の頭をカンと叩いた、時、」

俺はその儘川の中へ落ちてしまつた。

俺はその儘川の中へ落ちてしまつた。

その儘川の中へ。

體が地につかない

俺の身體が風船玉のやうに、飛んで行く、」
誰が飛ばしたのか、默つて居る。
幾つも幾つも青白い顏が、獨樂のやうに廻轉して居るが、時折心棒が拔けたのも寢て居る。
自動車が尻切蜻蛉と競爭して負けた。
驅けて來た電車が一寸停止つて息をついた。

素裸の街路樹が年を數へくらして居た。
中には泣い居たのも居る。
相撲をとつて腰の骨をさすつて居た。

求めても求めても

求めても、求めても來ない、
饑餓が折々言葉をかけては通る。
膝へ乘つたり懷へ這入つて、晝寢もして行く。

戀の奴は素通りして行く、
默つて居ると歌を唄つて通る、
出て見ると何處にも居ない。
暫くすると又來る、
二度目に必つと姿を變へて來る、
暫く見て居ると若いのは一寸も來なくなつた。

淺い春

春の宵空、
カフェーの窓から、
五色の酒に、ふはりとした、青年の魂が、
歌を唄いながら、
鐵鎖を渡つてガラス窓をそつと開けて、『
春雨のやうに四方へ散つた。

青年はいつた、酒は嫌いだ、嫌だ。
酒だ酒だと又言つた。

惱みも苦悶も酒さへあれば、
酒に好かれて春淺いのに、
惱みも酒だ、苦悶の人生、
酒に忘れた苦悶の人生。

汽笛

意地の惡い汽笛が、
俺の胃袋を搔拂つて行つた。
急に年を老つた胃袋、
皺だらけの手を伸ばして、無暗矢鱈にそこらの筋を
引張る、
腦天に喧嘩を賣られた。
額と鼻の間に斥候戰が行はれたから、
眼の中へ火花が散つた

二つ三つ、遠くの方から大砲が聞えてた。

徑端の水は元氣よく流れて、振り返つても見なかつた、

雲の間から地雷火が落ちて來て、俺の身體を臺なしにした、鴉が樹の上で、「クスクス」

東京郊外

東京の郊外は、
下駄は要らない、
舟が要る。

下駄は要らない、
舟が要る。

田舟が要る、
田舟が要る、
一本の竿に、

田舟が要る。

愛の代償

彼が、俺を憎み、俺は、彼を憎み。

Bは、俺を好く、俺はBを好く。

彼女は、俺を愛し、俺も彼女を愛す。

彼女が、

俺を戀すると同時に、俺は彼女を戀した。

彼女と、俺の戀が、白熱の焔を吹く時、白熱の焔に

包まれた時、その時に。
現在彼女に、第二、第三の俺があることを突然俺が
知つた時、時、その時、
俺の愁歎、俺の憤怒は、白熱の焔に包まれるか、戀
の焚火は消されるか？
戀の焚火は消されるか？

此の憎み、此の愛、此の戀は、それは、
母親が、みどり子に濺ぐやうな、憎みでもなく、愛
でもなく、深い柔らかいものではない。

一貫目の綿と、五百目の石塊と同一ではないことを
豫覺しての、憎愛であり戀であるのに、

母親は、
一分のものを「ハカル」のに、千尺の尺度をもちゆ
るのは、
例外ではない。

椿の花

溫かい風が、ぽつかりとやつて來た、
彼方の山に椿の花が咲いた、（といつて敎へに來た。）

馳け出して見たら、
河を幅てて、

霞の幕を張つて、默つて居た。

汗をかいた瞳

今の今迄、
俺はお前を、戀人と思つて居た。
今の今迄、俺はお前を、戀人と思つて居たのに。
今お前が、
投げた微笑みは、
確かに俺には、挨拶しなかつた。

挨拶しないで、途中で引返した。
俺の瞳は合はなかつた、抱き合はなかつた。

お前の瞳は、横向きになつて
首を、一寸下げて引返してしまつたではないか？

俺の瞳は、「アツケ」にとられて、途方に呆れた。
青空を眺めた、地べたを逼ひづつた、
その唐突の出來事に、
俺の瞳は、汗に濡れた。

「びつ」「ショリ」汗に濡れた。

雪降りの跡

灰色の雲は、地に落ちて白雲と化けた。

空の星は、月は、黑く光つて、

道路に一筋の、わだちの跡が、新らしい生傷（なまきず）を悼は
しげに横たへた。

家々の頭は、重い重いと、呻きの聲を呑んで、默々
として居る。

屋根裏の鼠は、
雪景色を見やうともしない。

屋根裏の鼠は。

囁き

此の間降つた雪が、
屋根の額に眉を氣どつて三日月なりに殘つて居る。

鶯は今朝から、裏の竹藪で啼き始めた。

梅の花の上に、月は、幾つも幾つも休んで居る。

愛の價値

俺が、
お前に物を贈つた時、それは高價いものだ、とお前は言つたではないか？
凡ての物の價値は、價格は、人に依つて定められたのだ。
人の生命は、人に依つて決定められたものではない。
それだのに、母親は愛するその子の爲めにその生命を捨てることさへ、あるではないか？

愛の戸惑ひ

お前は、俺を最後迄愛するといつた、
俺は、お前の言葉通り、最後迄愛されたい、
それは氣まぐれではない、眞劍にそうだ、
眞劍にそう思つた、そう思つて居る。
お前が俺を、最後迄愛するといつたやうに、俺も、
お前に、最後迄愛されて見たい。
俺を、最後迄愛して呉れ。
そこで、俺は、俺自らに煩悶した。

俺自らが反問した、自らを愛して居ないことを、
證據を握つた。
他人の言葉に從つて行く時は、
俺は一體誰を愛すればよいのだ。
誰のために。

高殿から見下したら

彼の瞳は馴れ馴れしく俺に言葉をかけた。
俺の瞳は挨拶しながら、
直覺的に、
高樓に馳け登つて見たら、
彼の瞳は腰を卸さなかつた。
斥候のやうな挨拶をした。
俺の瞳を溶解かすやうな、挨拶をした。
俺の瞳は堪え切れなくなつた。
高樓から轉落(ころけ)ちるやうに馳け降りた、彼の瞳を突き

とばして逃げ出した、
彼の瞳は、
俺の姿が見えなくなる迄、
笑ひ轉げて居た、
笑ひ轉げて居た。

迷へる鳩

道を忘れた一羽の鳩は、嵐に揉まれ揉まれて森の中
に迷ひて。
一人思案に胸ちぎる時、森に二つの呼ぶ聲ありて、」
迷へる鳩よ。
迷へる鳩よお前をわしは、待ち詫びてたよ、その聲
まだに終りもせぬに。
別な聲音で呼びものありし、鳩よお前は何處から來

た迷へる鳩よ。

お前の來るのをわしは待つてたよ、迷へる鳩よわし
はお前を待ち詫びたぞ。

戀の果實

エデンの園に咲く花に、我れは醉ひしぞ、咲く花に、
エデンに咲いた赤い花。

エデンの園に實を結ぶ、赤い林檎が眼に映えて、石
を投げたよ二つ三つ。
エデンの園の赤い實に、石は確かに的中つたに、赤
い林檎はまだ落ちぬ。

今度投げるは四つ五つ、塊めて投げて赤い實を、手
に取つてよう赤い實を。

濕地の火

Fよ、
お前は、なぜ、
俺の、手を振り拂つた。
俺が、お前に、握手を求めた時、その時、
お前は、俺の手を、振り拂つたではないか？

俺は、一時の氣まぐれから、お前に、握手を求めたのではない。
堪え難い、生の喘ぎから、生物的衝動から、必然的に求めたのだ。

だ、
時と場處は、必ずしも、Kの一室と、限られた譯ではなかつた。
過ぎた風吹く日の、夕暮れであつたのは、
偶然の結果なのだ。

俺の、失戀の詩の、曲譜を摸寫して居た時。
お前は、
俺の、前にある、一脚のテーブルの前に來て、暫くの間、無言の囁きを、續けて居たではないか？

その時、俺は、

無言の囁きに、感電した、
俺の、心臓の血液の流れが、
一時停つたのも、此の時だつた、此の時だつた。

その時、俺の、心臓の形は、破れた水車のやうになつた。
その時だ、その時だつた。
その三日前の、
一月八日の、午前十一時を五分過ぎた、その時だつた。

あの長い廊下の、眞唯中で、
お前から、受けた握手で、俺の血を沸騰させた。

全身の血潮が、右の手に集つて、躍つた。
體全體が、慄えて居た。
俺の瞳は輝いた、お前の瞳は輝いた。

俺が、廊下を歩いて行くと、
お前が、F室から飛び出して、
俺の手を、堅く、堅く握り締めたではないか?

その時は、その時は、
俺に、他の、一切のことを考へさせなかつた。
お前は、確かに、大きな磁石だつた。
俺は、一塊の鐵片であつた、
その時の、お前の姿には、

露を含んだ、薔薇の蕾が、朝日の輝りを受けた瞬間、
蕾が、花と變化する、その瞬間の、風情が、香が
溢れて居た。
その風情が、香が、
俺の瞳を、痛い程刺した。

恐らくは、お前の一生に、
たゞ、
一度しかない輝りを放つたのだ。
その時の、お前の姿は、
花か、蕾か、蕾か、花かを、判つきり正視すること
を許さなかつた。
出來なかつた。

俺の瞳を幻惑させた。
俺の體を、沖天に亂舞させた。

一本の燐寸屑さへ使はないで、
俺の魂に、體全體と、火をつけた。

過ぎた歳の、櫻島の爆發より激しく狂暴と、俺の血
を、沸き起たせた、躍らせた。
おゝ、
俺は、一切のものを、正視する力を失つた、目隠し
されてしまつた。
俺自身を、お前を見ることさへ、正視すること出來
ない。

盲目蛇のやうに、一切がたゞ、衝動的に、
生命が、燃燒される儘に行くだけだ。

俺が、廊下を歩いて行くと。
お前が、F室から飛び出して、素早く四方を見廻し
たその姿だけが。

ありありと、俺の眼に殘つてゐる。
お前の瞳と、俺の瞳と、抱き合つた時、
その時に、その時は、
お前と、俺は、個と個は、
全くただ、一つの焔となつて燃えた。

燃えた、燃やされた。
この焔は、この焔の焚木は、
何時誰の手で、積まれたのか?

焔の焚木は、お前も俺も持つて居た、
焚木は何時でも、積むことの出來る、用意してあつ
たのだ。

廊下で握手する、幾千日か前、既に、既に、焚木は、
お前と俺の手で、積まれたのだ。

F室で、お前が事務を取つて居た時。
俺がそこへ、行つた時、

お前は、俺の手を取つて、直ぐ側に、
俺を、腰掛けさせたではないか？

俺の心臓の血と、お前の心臓の血が、混合(こつちや)になつた
のも、躍つたのも、恐らくは、此の時だつたらう。

お前は、ペンを輕く、走らせながら、
重苦しさうに、口を開いて、俺に訊いたではないか？
俺に、言つたではないか？

Nよ。
あなたは、獨りで淋しいの、
淋しくもあらう。淋しくもあらう。

凡ての人は、みんな一人よ、凡ての人は。
Nよ、あなたは
親や兄弟やが、永遠に一緒でないことを、知つて居
るでせう。
親や兄弟や、友達の總てが、あなたを見棄てたから
とて失望するには及ばない。
わたしだつて一人よ、獨りよ、
わたしだつて獨りよ、獨りですよ。

Nよ、あなたが淋しい程度には、
わたしだつて淋しいのよ。

若し、あなたが、社會の凡てから棄てられたつて、

失望するには及ばない。

あなたと、一緒に行くものもあるのよ、

わたしは、必つと、

あなたと一緒に行きますよ、行きますよ。

と繰返して、

俺の瞳を、お前の瞳は、びつしより濡れる迄、抱擁したではないか？

それから暫時は……

互に無言の儘に……時を過ごしだ。

その無言の瞬間、その無言の瞬間に、

何時の間にか、次の室へ通る「ドア」は誰の手でか

堅く、閉ざされて居た。

その瞬間に、次の室から笑ひの動揺めきが起つた。

笑ひの動揺めきが、起つたその時、その瞬間、お前の顔は、耳元迄眞赤に染つたではないか？

薄衣で包んだ、眞紅の玉のやうに、眞赤な、眞赤な、焔を揚げた。

その瞬間に、その瞬間に、

二年有餘の間、刻まれた焚木は、

俺と、お前の手で、

無言の中に積まれた、積まれた、積み重ねられた。

既に、既に、
焚木は刻まれ、乾燥されて、積み重ねられ、點火さ
れたのに、
なぜか、焰は揚らない、焰は高く揚らない。
濕潤の底地に積まれたのか？
死人の涙で孕んだ空氣で、蔽はれて居るのか、焰は
揚らない。
焰は揚らない。

燃えることを妨げるものは、雨か雪か、
死人の涙で孕んだ空氣か？
積まれた焚木に、燃燒の力が乏しいのか？　焰は揚

らない、焰は揚らない。
蚊やり火に似て、いぶせく、
燃えず、消えず、焰は揚らず。
時雨日に燃える、瘠せた濕地の篝火のように、焰は
揚らず、焰は揚らず。

積まれた焚木は、積まれた焚木は、
眞黑な姿を横た　て。
眞黑な姿を横たへて。

大雨か、大雪か、大風かを待つて居る。

題なし

赤い血が、躍る。

炭は、徒らに黑く。

潜む力

地底から傳へ來る、
新らしい香の爆音、
時を隔てゝ、地殼の皮を、
恐しい力で……
恐ろしい力が……
地底から傳へ來る、
新らしい香の爆音、
時を隔てゝ、時を隔てゝ。

焔

焔は燃える。

焔は燃える、
無音の焔が、
眞赤に燒けた、焔の玉が。

凡てを欲するものに

俺は、見ず知らずの、
通りがゝりの人から、
お前のもつてゐるもので、一番大切のものを呉れと
　催促された。

俺は、お前の欲する、凡てのものを、お前にやるの
　だ。
それは、お前のものでないからだ。

自由に惱む

凡てのものは、凡てのものに屬し、又屬さない、

黄と青と、交合すれば、綠が生れ、

赤と黄と、交合すれば、橙光色が生れる。

凡てのものは、凡ての屬であつて、又凡ての屬でない。

二は一の二倍である。

八角のものを、その一角を見て、全部を知ることは出來ない。

正確な批判するには、全部廻れよ。

灰色の雲も、地に落ちれば、白雪となる。

黑雲が、水色の雨を降らす。

青い樹も、赤い樹も、白色の紙も、眞黑な炭も、みんな同じやうに、燃えてしまへば、灰色を通つて、土となる迄だ。

八十歳の老人も、一度は必つと、若い時があつたのだ。

まだ歯の生えない、乳呑子だつて、何時かは年寄り
になるのだ。

俺は、お前が好きだ。お前が好かなくつても、お前
は好きだ。

俺は、お前を愛するよ、

お前が、愛さなくつても愛するよ、

俺は、お前を戀してゐる。

例令へ、お前が、俺に戀しなくつても、

俺は、お前を戀してゐる。

少しの間も、忘れようとしても、忘れられない。忘
れやうと努めねばならぬ程。

忘れようと、努めれば、努むる程、お前を、忘るる
ことが出來ないのだ。

お前は、此の俺を、好かないかも知れないが、好か
なくつてもよい、好かなくつても好い。

お前が、好かないのなら、好かなくつても好い、

俺は、お前を好きだから、俺は、お前を愛してゐる
から。

俺は、お前を戀してゐるから。

左行くも、右行くも、それは相互の自由だから、

左行かうと、右行かうと、それはお前の勝手だ、
右行くことが、左行くことが、
それが、お前の自由意志の、發動からであつたなら
ば、仕方がない。
何程迄、お前を待つて居ても、お前が來なければ仕
方がない。
お前が、來なくつても、俺が現在、お前を待つて居
ることに、なんのかはりがあらう。

俺は、お前を、隣分遠くの方から、訪ね出したのだ、
お前の姿が、まだ、よく見えない遠くの方から、ま
だ、香もしない、遠くの方から、
お前の、姿を訪ね出したのだ。

見つけ出したのだ。
お前が來るのを待つて居る、お前が來るのを待つて
ゐる。

お前が漸く側へ、近づいて來るに從つて、
お前の姿が、擴大された。
お前の姿が、正確に見えて來た。
お前の姿が、明瞭りと、
その時、お前と一緒に來たものがあつた。
それは缺點といふものであつた。
然し、それは俺の杞憂であつた。
お前が、愈々側へ、近づいたのを見たら、一緒に來
た筈のものは、何處へか行つてしまつた。

お前も人間だ、お前も人間だ。
お前は、口癖に短氣だ、短氣だと、いつて居ても、
俺にはそれが見當らない。
現在のお前は。
ある强烈な刺戟を受けて居るから、落ちつけないのだ。
針のやうなもので、體全體をつゝかれてゐるのだ。
それで、お前の氣がいら〳〵するのだ、
無理もない、無理もない。
俺だつて、錐の突先で中返りは出來ないもの、
恐らくは、お前だつて、出來よう筈がない。凡てが
道程だ、凡てが道程だ、

燃え揚がる、焰を無理に、妨げやうとするものは、
お前自身でなくて、誰だ。
どんなに、妨げる心意りでも、燃えて居る、
事實は、どうすることも出來ない。
それを、否定しようとすることは、
その事實を肯定するからだ。

凡てのものが、
燃燒されて、しまへば、必ず灰になる。
灰になる、灰になる、白い灰に、灰色の灰に、
白い灰は、頓ては土になる、灰は土と變化する。
白い灰に、なりきれない時は、燒棒杭で地中に埋め
られるのだ。

それでなければ、腐蝕するのだ。

凡てのものは、本質的に、一つの原素に歸るのだ。
どちらでも、何れは同じ土と變化するのだ、土から
生れて、土に歸へる。
『ア、』何んと、立派な詩ではないか?

拍手が鳴つた、拍手が鳴つた。
兩の手が、掌が、一度に、强く合つた時、
拍手がなつたのだ、
片つ方の手を、いくら變る變る、同一の距離に迄、
强烈に、手を振つて見ても、
拍手と、同一の音響は起らない。

同一の音響は起らない。
それは、偶然ではない。偶然ではない。

現在の俺は。
お前の知つて居る通り、ある時間は、
殆んど、お前の言ふ通りに、なつて居るではないか?
お前も、解つて居るだらう。お前も解つて居るだら
う。
俺は、俺自身は、一切の技巧を廢して、他人の批評
がどうあらうと。
俺自身の、現在の生活に、觸れるかどうか、それだ
から、俺自身の現在、生存して居る事實は、誰が
どうすることも、出來ないのだ。

俺は、他人のために、生きて居るのではない。
俺自身の、生存意識の燃焼に依つて、
俺自らの、維持がされるのだ。

俺は、お前を戀して居る。
俺のために戀してゐることが、
現在俺は、俺自身が、戀のために俘虜になつてゐる。
戀の俘虜になつてしまつた、
若し、お前が、俺の戀を斥(しりぞけ)るならば、それでもよい、それでもよい。

然し、俺はその時は、過去及び現在迄の、
俺ではなくなるだらう。

俺の意識は、幻影のやうに、消え去るだらう。
燃え解けた、蠟燭の心のやうに、再び燃え揚がる力は、なくなるだらう。
燃える意識は、なくなるだらう。

その時は、俺は、俺自身は、汚なくよごれるだらう。
此の汚染は、俺自身の存(あ)る限り、必つと附き纏ふに相違ない。

現在の俺は、俺自身の、一切の生活をあげて、戀の生活をしてゐるのだ、
これではならぬと、思つてもやつぱり、どうすることも出來ないのだ。

全く、戀の俘虜となつた、
現在の俺の生活を、お前が、無視するならば、それ
でもよい。それでもよい。

俺は、お前に、戀する資格が、なかつたと斷念する。
然し、俺自身の、魂の奥底に、燃え揚がる焔は、押
へても押へても、押へきれないのだ、
此の思ひを、無視するならば、それでもよい、それ
でもよい、それはお前の自由だから、それはお前
の自由意志だから、
個は、個の自由を認めねば、ならないから、嫌やな
らば仕方がない、嫌やならば仕方がない。
俺は、お前の自由はどうすることも、出來ない、

俺は、お前の、自由を拒むことは出來ない。
お前が、俺を、棄てるならば、捨ててもよい、それ
はお前の、自由だから。
俺は、お前に、抗議する權利を有たない。
俺は、お前に、抗議する力を有たない。
資格がない、資格がない。
個と個の自由を、認めるから、
途方に暮れる、泣いても涙は出ない、泣けない、俺
といふものを考へるのも嫌だ。
その時は、必つと俺自らが、自らを滅すだらう。
華嚴ではなく、淺間ではなく、海ではなく、河では
なく、線路ではなく、細帶でなく、

人の氣がつかない、斷崖から飛び降りて、
俺の體を粉碎するのだ。
その時は、恐らくお前にも見えないだらう。
例令へ、俺が、どうなつても、お前には罪がない。
俺は、お前を怨まない、
俺は、現在、無條件でお前を愛してゐるのだ、戀し
てゐるのだ。

お前が、俺を嫌ふことは、俺が、お前を戀してゐる
ことと、別な問題であるのだ。
個と個は、全く別だから、
若し、お前が、生れなかつた時でも、俺は生れて居
たかも知れない。

俺が、生れなくつても、お前は生れて居たかも知れ
ない。
現在、俺が、お前に戀したことは、偶然の結果なの
だ。
然し、それは、必然的運命の下(もと)に、生れた、偶然の
結果なのに、外ならないのだ。

お前が、俺を愛さなくつても、
お前が、俺を戀しなくつても、どうして、
俺に、お前を憎むことが出來るか——
お前が俺を愛さない時は、お前が俺を戀しない時は
やつぱり、俺には、お前を憎むことは出來ない。

その時は、俺は、獨樂のやうに、獨りで、
「ヂリヂリ」と社會の底に沈んで行くだけだ、
その時だつて、恐らく、お前さへ棄てた俺は、社會
から省みられることはない。

然し、それでも仕方がない、それでも仕方がない。
お前の生きて居ることが、俺の生きて居ることの、
必然條件ではないから、お前を責める譯にはいか
ない。

過ぎた日に、俺の手を振り拂つたやうに、
俺の戀を振り拂つたつて、失望はしない、
落膽はしない、何も考へない、

凡てが運命だ、失望より、落膽より、再び、失望や
落膽のない社會に向つて突進する。

俺は、お前の側に居る時は、
暫しの間は、慰めでもあり、又苦痛でもあるのだ。
此の苦痛を、長く續けることは、俺には堪えられな
いのだ。
双を振り翳ざれて、殺すぞ殺すぞと、詰寄られて居
るような、强烈な感じに打たれるからだ。

殺すなら殺して呉れ、早く殺して呉れ、
早く速く殺して呉れ、
そうでないなら、早く速く、殺さないと、

一口言つて呉れ、振り翳した双を引いて呉れ。
狂亂の夜は、何時迄續くか？
殺すなら殺して呉れ。
俺は千仞の溪谷に落ち込んでゐるのだ、俺の叫び聲
を聞くものは來て呉れ。
死は俺の手を取つて、無理矢理に、引立てやうとし
てゐるのだ。
頻死の俺を、救ふものは、
お前より外にはないのだ、頻死の俺は、お前の手に

すがらうとして、待つてゐるのだ、
俺を死の道から、引戻す力をもつて居るものは、
お前より外にはない。
お前より外にない。
俺を救ふものは、
頻死の俺を救ふものは、
お前より外にない、お前より外にない。
お丶、
戀するお前の手を、俺は待つてゐる、
お丶戀人よ、
戀人よ、

亂舞する心

心臓の血は、徒らに騒ぐ、
眼は意地悪く、凝視させない。
混亂する腦髓、

體が俺の知らない間に、
舞踏の稽古を始めた。

俺が會つた時

俺が、お前と、最初會つた時、
お前は、七彩の色で、顏を飾つた、
無意識に、首を垂れた。

俺が、お前と二度目に會つた時、
お前は、微笑みを殘して姿を消した。

俺が、お前と、三度目に會つた時、
お前は、體を俺に、たゝきつけて、
默つて姿を消した。

俺が、お前と四度目に會つた時、
俺の寢て居る、臥戸をたゝいて、俺を呼び起した。

俺が、戸を繰つて見たら、
暗闇が默つて、
俺の顏を撫でた。

傷口から迸り出る血

眞赤に、眞赤に、
燃え揚がる魂の囁きを、愛人の手に渡たし、嘗つて
の持病であつた、鼻の手術を受けた。

出血を恐れて、安靜を守るために、
假に病院の一隅に身體を横たへ、
獨り傷口の手當をして居ると、
俺の考へない何者かゞ、俺の眼に見えない何者かゞ
今切つたばかりの傷口を、引搔き廻す、引搔き廻
すので、

出血を甚しく、俺を傍人を恐れさせた。

俺の生存に、直接の關係あるなきやは知らねど、宇宙の大眞理で循還して居る、時間は、俺の傷口の、癒えるのを待たないで、太陽を海の彼方へ沈ませた、

時計の針を、四時二十分過ぎに指示させた。

診察室は、第一、第二ともに、清淨に掃除され、俺の鼻を診た、鼻鏡も、俺の鼻を手術した鋏も、その他一切の機械は、

今日も亦、前日と同やうに、一日の勤めを終へて、若い女性の手で、毎日の寢床へ移された。

最早、診察室にも、研究室にも、待合室にも、一人の患者は居ない。

幾十かある窓のカーテンは、一様に眠むさうな眼を俺に投げつけた。

若い女性の一群れは、朝から纏ふて居た白い星のやうな着物を肩の邊りからこけ落として居る。

此の人々には、今食堂の方から頻りに呼ぶものがある。

白い湯氣、赤、黄、青、綠、その他種々様々の色や香が、からみ合つて遊戯して居るのが見えた。

群の、クキンは叫んだ、食ひつくやうな聲で、

時計は何時ですか？

時計臺の前に居た一人は答へた。
四時二十分過ぎです。
クキンは又叫んだ、堪え切れないような聲で、
遲いのね、皆さん行きませう。

此の皆さん行きませうの言葉は、第一、第二の診察室、待合室、研究室の隅々迄驅けて歩いた。

若い女性の一塊は、足並を揃へて、北斗星のやうに靜かに靜かに、銀河のやうに、尾を引いて行つた。

俺は一人取り殘された。
傷口からの出血はまだやまない、

先程から、膿盆に何杯か、脫脂綿とチリ紙の赤い山が、出來ては消え、出來ては消えた後であつた。

若い女性の動いた時、
北斗星のクキンは言つた。
俺のベットを斜めに凝視めて、
「醫局へ移れ、醫局へ移れ」
と針のやうな言葉で言つた、
鉈のやうな言葉で打切つた。
後には淋しい木屑が、夥しく呻めいて居た、
新らしい佛の墓地のやうに、燃え殘りのセン香が、
其處此處に取り亂されて居た。
慘たらしく踏みにじられて居た。

一人取り殘された俺は、うんと力んで、
俺の身體を擔荷に來せて、醫局に運んだ、
俺の身體は頻死の狀態にあつた。
醫局に移された俺の身體は、頻死の狀態であつた、
醫局に移された俺の體は、鈍刀で打たれたやうだつた。

傷口からは、新らしい一血が先を爭つて出た。五六人の醫員は、人生最善最惡の龍卷きを起こして居た。
職業的に血を見ることに痲痺して居た、醫員達にも俺の赤い血が、直覺的に、

醫員達の顏を曇らせた、遠雷の響きを誘ふた、最少限度の不安に襲はせた、
人間性の衝動を起させた。然して一時的の手當をせねばならなく、餘義なくされた。
新らしい脫脂綿新らしいチリ紙は、此の人達の手から與へられた。
出血は却々止まない、

俺は最善の手段として、暫時にして醫局を出て、歸宅に急いだ。
門外に出た、長い廊下を通つて、門外に出た。
信濃町驛から代々木驛附近に向つて、足を運んだ、
蟻の逼ひづるより遲く歩いた。

行き來の人は、前から來た人も、後から來た人も、
等しく同じやうに、
俺の顏を覗き込んでは通り過ぎた。
行き過ぎた。
前から來た人は後へ、後から來た人は前に、時の流
れと一緒に、數へ切れない程多くの人が、俺を乘
り越して行つた。

千駄ケ谷驛と隣り合つた、冬枯れの芝原は、深い默
想にふけつて居た。
芝原の脊中に一本の太い徑が、眠りかけた大蛇のや
うに、ぬつと流れて居る。
俺は今此の大蛇のやうな徑を歩いて居る。

俺が芝原の入口に足を運んだ時、
一人の年若い女學生らしい女が、銘仙の着物と同じ
縞の羽織に身體を埋めて、毛糸の襟卷を無雜作に
肩に一捲き捲いて、
左右の端は足を運ぶことに、蹴りあげられて、蛇の
やうに躍らせ歩いてゐた。

彼女は、何か頻りに捜して居るやうに、
小高い處を選んでは丈伸びして、彼方を見て居た。
そうして歩いては又丈伸びしては見て居た、彼女
は、芝原を、同じやうに幾廻りも廻つた。俺の周
圍を　道路を、
彼女は、時々太い溜息を漏らした、その時々に、空

氣は左右に分れて躍つた。

彼女の、太い溜息は俺の傷口をじはじは訪ねた。俺の足の遲いのと、彼女の廻旋(まは)るのと何等かの關係があるかのやうに考へさせられた。

太陽は西の方から赤い尾を引いて、此の附近の凡てのものを撫るやうに、サツと照らした。

電車は幾臺、幾臺も、姿を消した、

小供達は、家々の影に抱かれて、元氣よく輪廻しをして遊んで居る。輪は下から上に、手前から向ふに、と、きちんとしたあるものに乘せられて廻轉つて居る。

俺は、新らしい脱脂綿と新らしいチリ紙を、無意識

的に、チギツては取換へ、チギツては取換へて鼻孔の栓をした、

一つの習癖のやうに繰り返した。

小供の廻轉さす輪の音が頻りに俺の耳朶を叩く、小供の中には何やらいつて泣き叫ぶものもあつた。

小供の廻轉する輪のやうに、俺の運命も廻轉する、

小供の成長の上にも、枯草の上にも、彼女の上にも、同じやうに、

運命は小供の廻轉する輪のやうに、還境と共に變遷つて行くことである。

俺の遲い足も、何時か芝原の彼女の姿を消させた。

家々の影、車馬の輻輳を後へ追ひやり、小供の姿を忘れさせ、新らしいある感じを小刻みに、鐵道線

路を迎へ過ぎ、

夕餉の仕度の忙しい時、小供と病人のある家の主婦の懷に、懷は抱かれた。

其處の主婦はいつた。心から叫んだ。

充血した心臓を露き出して、海綿のやうな手にふはりと、俺を抱いた。

彼女から驚きの言葉は發られた。

殆んど無意識的に乾き切つた心臓を搾るやうに、

大變ね、なんて亂暴な人だらう。

無茶にも程がある。

彼女の心臓は、破れてしまつた、

彼女は破れた、血みどろな手に、一本の冷めたい牛乳と、肉汁とを喘ぎ喘ぎ持ち運ばせた。

彼女の宅の便所の附近を血で染めたからである。」

彼女は、その血液の補充のためにと、彼女自らの血液を以つて、

俺の血を增せよと祈つた。

五人の小供に、靜かに靜かに、と言つて柔らかく手振りして制した。

子供等は、ある欲求を奪はれたやうな様子で、疊の上を歩いて居ながらも、

充分に身體を伸し得なかつた。

暫くの間は、子供等は、互に聲を呑み風の微動きもうるさしとした。

被女は、痛た痛たしい聲を振り絞つて、

自宅に歸れますか？

自宅に歸れますか？

大丈夫、宿泊つて居つたらよいでせう。

狹くてもそれ位の席はあつてよ、

途中で倒れたら大變だから、若しや、途中で、

今歸つては電車が雜踏するよ、も少し經過つてから

歸つたらーどう。

若しやのことがあると大變だから、と彼女は、頻りに小刻みの不安を繰り返した。

でも眞夜中に出血でもしたら大變だから、

その時はどうなさる。一人では仕方がないだらう。

一人では仕方がないだらう。

氷袋を持つて、……

彼女の滅入るやうな感情は、俺の心臓を掴み出した、

俺はとても堪え切れなくなつた、彼女は生物的、人間的衝動に燃えて、現在彼女自身の、日々の不安を、經濟的に、精神的に一層の苦痛を增すことが、

俺を直覺的に、そこから追ひ出した。

彼女はその家族と共に、俺の身の上を子供の吐いた石鹼玉のやうに氣づかつた。

どうか氣をつけての一語の中に、言葉に現はし得ない不安を孕んで送り出した。

電車待つ間に、電車に乘つてから、彼女に殘した不安の塊を氣づかひながら、樣々の芬圍氣と一緒に搖られながら下落合の俺の巢に吸ひ込まれた。

何時ものやうに、外から鍵を外づして中に這入ると、直感的に何者とも知れぬが俺の頭を打つた、冷めたい風が、何處からともなく、强く流れて來た。今這入つたばかりの俺の足元を搔き亂した、不意に何か投げつけて姿を消した、電燈は眞闇だ、玄關は取り亂されて居た、無茶苦茶に引つ搔き亂されて居た。

暫くの間　俺と一緒に居た若い男が逃避した跡が、生々しい血を流して居た。

大暴風雨のやうに、襲ひ去つた後であつた、俺の留守の間に、俺の留守の間に、暴風雨のやうに暴れに暴れ、荒れ狂つて姿を消した後であつた。

彼は、俺と數ケ月の間同棲した、

彼は、俺に無理矢理に同棲を强要して、

俺を自分のやうに親み、親のやうに尊敬し、兇器のやうに使驅つた後で、恐れを起した、慄き出した狂犬のやうに、恐れ慄いた。

奔馬のやうに、もてあました、

彼は、彼自身の獨我的意志の燃燒が、俺を親み、俺を尊敬し、俺を敵とした、

最後が俺の留守の間に、彼自身の逃避で幕は閉ぢた。

最初より、最後迄、主觀經濟のために、俺に接し俺を放れた。

彼は恐らく、野良犬のやうに、社會を彷ふのだ。

野良犬の彼は、征服的意識に育ち、主觀經濟のために沒頭して居る彼は、遂に、そのために逃避した、

然し彼が人生を逃避するのは何時だ、

彼は人生を何時逃避する。

何時だ、何時だ。

山の精

山の乙女は松風と、
松の葉風と山彦と、
聲音を合して唱つて居る。
松の綠の永久しいに、
變らぬ操と競ひして、
巖に溪に、こだまして、
玲瓏玉碎影白く、
谷川せゝらぐ水の瀨に、
輕い姿を運ばせつ、
里に都に山の精を、

松風微動ぐ山の精を、
里に都に送るのよ。
永久しい迄も山の精を、
里に都に送るのよ。

螽蟖

秋の野に鳴く螽蟖（きりぎりす）、
秋の野に鳴く螽蟖、
秋の野山の七草を、
鳴く螽蟖は友として、
照る日降る日月の夜も、
廣き自山の社會にて鳴暮らす螽蟖。
ある叢のその中で鳴き叫ぶ螽蟖、
礫を投げた星の下に、野露を蹴り散らし、」
自由に馳ける螽蟖、
月を眺めて星を呼び思ひ切つて一飛び撥ねるを、

寢は寢ても

寢は寢ても夜もすがら、切れ切れの夢、

醒めても、幻影の市、

朝まだきに、

とろ〳〵と朝日指す迄。

秋

秋が來た、眞晝を通して朝夕涼しい秋が來た、」

何處へ。

山に里に、それそこの芝原に、郊外に、何處から來た。

彼方の森の赤い樹に、

紅い顏した秋が來た、

都會の空にも秋風が起つ。

陽盛り

百度の焔を渦巻く災熱下に、勞働者は素裸で働いて
居る。
トロ押し、砂利下し、材木運搬
汗は流れる瀧となつて、五體の中に大河小川を作つ
て四肢を走る。
眞晝の災天に、
鐵を溶解かす陽盛りに、
鋼鐵作りの機械、激しく振りあげ振り下すスコップ、
振りあげ振り下すスコップ、
勞働者の汗と汗。

飢饑と貯金

二階の同居人は、病氣のために適當の仕事が見當ら
ない。
働かふとしても仕事がない、
別に金儲けの道もなければ、
今では饑餓を待つだけだ、
空腹だけを我慢をすればよいからだ。

窓下を通る人が、貯金の話をしながら行つた、
下の同居主の息子であつた、銀行の外交員だからだ、
彼は他の銀行が破綻した話をしたら身慄えした。

霧の中から我れを呼ぶ乙女

霧の中から我れを呼び止める乙めよ、
乙めよ、乙め、
お前はなぜ、此の我れを呼び止めるのだ、
我れは今漂泊の旅路に疲れ疲れて、わづかに外骨を
掩ふた皮膚さへ傷つき破れて居るのだ、
疲れて居る我れの耳元に何處からか、我れを頻りに
呼ぶものがある。
姿を現はさないで頻りに呼ぶ乙女がある。

乙女、霧の中から呼ぶことを辭めよ。
霧の霽れる迄で待て、然して後呼べ。
底迷の霧は何時霧の霽れるか知れねど、
霧の霽れる迄呼ぶことを停止めよ、
我れは漂泊に疲れた上に、お前の聲を聞くのが堪え
切れないのだ、姿を見るのが、
そのために一層の疲勞を增す。
我れは今息も絶え絶えである。
乙女我れを呼ぶことを暫く待て、霧の霽れる迄待て、
若しお前に、辭み難い事情があるならば、
霧の中から出でよ、

然して來たりて我れを抱擁せよ。
疲れたる我れを抱擁せよ、我れに新生の泉を與へよ。
我れは飢え渇して居るのだ。
新生の泉をもてるものは——與へよ。
新らたなる力を與へよ。
一雫の水を、投げを與へよ。

我れは今飢え渇して路傍に倒れんとしてゐる漂泊人
である。
我れの飢え渇して絶命の後我れを呼ぶ勿れ、我れを
呼ぶなかれ、我れを呼ぶものは、
死に頻して居る我れを呼ぶものは、新生の泉を持て
るものである、

絶命に頻して居る我れに新生の泉を投げ與へよ。

霧は益々深きに、
お前の聲が姿が、我れの耳元に、眼の前に微かなが
らも近づいて來る。
死に頻して居る我れの耳元に、お前の聲が、お前の
姿が近づいて來る。

死に頻してゐる我れの耳元に。

冬の夕日

冬の山々はからりと晴れ渡つて、一雲も止めない。
關東の平野を横切る汽車の旅に、車窓から首を差し
伸べて、
陽の入る彼方に眼をやれば、
雪の赤城に殘る陽は、忙しげに、又呑氣さうに、腰
を卸して、關東の山々を平野を見卸して居る。
利根の流れに散る木葉のやうな小舟に人二人、
夕陽の水氣浴びて陽の落つるのを見つめて居る。
汽車は轟々と鐵橋の上に寂しく音を殘して南に南に
走る。

天氣續きの畑に小腰をかゞめて、鍬を手にせる農夫
の姿が汽車の歩みと共に、蟻のやうに小さくなつ
て見えた。
土は夕氣を吐いて我等を慰めて呉れる。
そこ此處の家根からは、夕餉の煙が女狂人の帶のや
うに靉靆いて村々を取卷いてゐる。夕陽は赤城の
山の姿を隱して急いで彼方の山から、彼方の海に
沒した。

薔薇の花

お前庭の薔薇の花、
白い上衣に赤い心、
綠の裾を引きながら、
夏の初めの頃ほひに、
露を含んだ薔薇の花、
芳し香いと高く、
露を含んだ花瓣は、
觸らば落ちん風情にて、
頬笑みこぼるゝ花瓣は、
訪づる蝶や蜂の群れ、

訪ひ來る儘に手を伸べて、
赤い心の徹る迄、
しかと接吻抱擁して、
互に移す己が身の、
持てる花粉を欲(おし)みなく、
自然の儘にその儘に。

戀の焔

常にニコヤかな姿して俺の前に立ち現はれ、俺の氣を激まして呉れお前、

お前は、俺の心の淋しい時、愉快な時、疲れた時、俺の心を癒して呉れる。

又俺の氣づかない時、默々として來て、俺の肩を叩いて、ほゝ笑みを投げて呉れる。

お前の微笑みは俺を活殺自在にする、疲れてる時でもお前に會へば必つと元氣になる。頻死の患者に一本のカンプを注射した程に急の間に元氣づく、瞬間は元氣づく。

そしてお前は音もなく消え失せる。

然してお前の顏が俺の顏の前にない時は、俺に一層の疲勞を感じさせる。

時折りは、又俺が眠つて居る時に來て搖り起こす。目醒めて見れば聲をもなし姿もなし。

たゞ幻覺を殘して立ち去る。

俺が何かに熱中して居ると、

お前は俺の手を堅く握りしめて放さうともしない、

寂しい處にも、擾しい處にもお前は必つと飛び出して來る。

ある時は突然俺の唇に接吻して、

俺の瞳を異様に輝かせ、
俺に大聲を發させて傍者を驚かせる。
俺の身體の血を瀑布のやうに沸き起させる、
大洋の怒濤のやうに肉を躍らせる。
然して哀愁の淵に俺を投げ入れる。

暗夜に荒るゝ海底深くそつと俺の身體を抱き込んで
行く、お前。

烈火の中に、千仞の溪谷に、俺を突き落とし、夜と
なく晝となく、曠野に俺を彷はせて微笑むお前。

又は人なき山々の嶮を攀ぢ登らせ、

狼の群れに俺を渡し、千里の砂漠を一滴の水さへ與
へないで彷はせ、又全世界の雷鳴を俺の耳元に頭
上に一時に轟かせ俺の肉體から一滴の血液さへ殘
さず吸ひ取り搾り取り、肉を剝ぎ食らひ、

最後の骨の一片さへも傷けねば辭まぬお前、恐らく
は、恐らくは、
素裸となつたお前は、一切の欺瞞の衣を脱ぎ棄た時
は、相手の俺を蹴り倒して死の手を渡す時だ。

然してお前は失戀の曲を奏でながら、凱歌を高く聲
朗らかに永遠の謎の國に旅するお前、

戀の俺は凡てを燒く、
戀の俺は凡てを燒かなければ停止まない。
永遠の謎の國迄戀の焰はあげられる。
失戀の曲は何處で奏でるのか、
幽かに幽かに俺の耳元に聞えて來る。

今も俺の耳元に早鐘のやうに聞えて來る、」
永遠にやまない失戀の曲が、
早鐘のやうに聞えて來る俺の耳元に。

斷崖

飢ゑて居る人々の一群れが、
身體を横にしても、縱にしても
一人宛つしか通れない崖道に出會はした。
余義なく一列になつて一人宛つ崖道を辿つた。
此の一群れは、
飢えと寒むさを耐え耐えて此處迄來たのだ。
群れの先達の一人は突然進むことを停止めた、
後から續いて來る人々は突然一人の先達者が停止つ

たので急に動搖めきの波を打たせた。
波は最初の一人より後に行く程強くなつた、
最初の一人は音もなく停止つたのだ――が、
後に行く程大波を打たせて、――
喚叫の聲さへ起つた。

先達の一人は停止つた――同時に、
彼れの血色は見る見るよくなつた。
彼れの肉は見る見る肥滿した、
彼れは飢えたる凍えたる人々の、
幾十幾百幾千倍の力を増した、

彼れは動かうともしない、

彼れは偶然先達者になつたのであ 。
偶然に崖と崖とのある處へ來た時から、
その瞬間から、彼れに丈け飢えも寒むさも感じなく
なつたのだ、

その時から彼れには、
後方の人々の喚叫は音樂のやうに聞えて來る。
動搖めきは舞踏のやうに見える。

その幾千倍幾萬倍もて後方の人々の泣き叫ぶ聲の激
しい程、
彼れには愉快でならない。

彼れの現在立つて居る處は無風帶である。

手を働かさずとも足を運ばずとも、
彼れに必要な食物は自然に、
彼れに丈け供給せられて居る。

だから彼れ一人は動く必要は感じない、――然し彼れより以外の後方のものは、彼れの肉が肥れば肥る程、

力が增せば增す程、
後方のものは泣き叫ぶ、
泣き聲は。今や、死の絕叫となつたのである。

最早後方のものは。叫び聲さへ出ない、
叫び聲はぴつたり停止んだ、
叫び聲はぴつたり停止んだ。

おゝ死か突擊か、
叫び聲さへ出ない、
おゝ死か突擊か？

裸體

裸體の畫像を見て居ると、
歩き出しはしないかと、心待ちに待つて居ても、何
時迄經過つても歩き出さない。
やつぱりいくらよく出來て居ても、裸體の畫像だ。
やつぱり裸體の畫像だつた。

俺の處へ來るならば

お前は、俺の前に、來る時は、
俺の欲するものを、忘れてはならない。
若し、それを忘れて來るようなら、俺はお前の、來
ることを望まない。
俺は、お前の姿を、見ることを嫌ふ。
俺は、お前が、俺の前に來る時は、必つと、俺の求
めて居るものを、持つて來ることゝ思つて居る。

俺の求むるものを、
お前は、既に、消耗し盡したなら、
俺の前に、來るな、

俺は、お前の姿を、見ることが嫌だ。

それでも、お前が來るならば、……

俺は、眼を瞑つて、盲目の持つ杖で、四邊かまはず
振り廻して、

お前を追ひ振ふのだ。

ものを言ひかけたは

お前が、俺にものを言ひかけたは、
俺の瞳を、くすぐつたは、

俺の心臓を、盜みたかつたからだ？

俺の心臓が、怒つたら、

お前は、斷崖下に、姿を隱した。

空腹と肉の香

俺の前に、
一皿の肉が出た、
クン　クン　俺の鼻を鳴らさせた、
俺の胃袋を、搔きむしらせた。

皿の肉は、甘さうな脂肪を躍らせ、
香が溢ふれて、歌を唄つて居た。

空腹の俺は、騒ぎ出した、
その肉が甘いか——不味いか、

それとも毒けの溢ふれか……

空腹の俺の眼は、
俺の鼻は、たまりかねて、
聯合して、口を煽動した、
何んの遠慮が、あらう筈がない。

口は勢込んで、皿の肉に嚙りついた。
俺の齒が、ガチリツと嚙りついた。

その時、その瞬間、俺の齒は、
俺の第六感は、

直覺的に、妨害した、
大急ぎで、口に進擊中止の命令を下した。
そして、眼と口と鼻の、聯合軍に警告した。眼と口
と鼻の、聯合軍は、狼狽した。

俺の第六感の反應は、
口から吐き出した。

皿の肉塊は、舐つた舐り滓だつた、舐つた舐り滓だ
つた、塊めた骨の糟だつた。
喰んで吐き出した、舐り糟だつた。

油のやうな衣を着けた。

毒塊だつた。
毒塊だつた。

ぼんやりした罪

お前は、俺の眠つて居る間に、
俺の魂の衷にある、
快活を、盗んで行つた。
そして、憂鬱と、憤怒を、取り残して行つた。
持ち去られた快活は、時々俺の懐が戀しがつて、微
笑みを振り返へらせる、
取り残された、憂鬱と憤怒は、

時々、その本性を露はして、二つの矛盾を、
繰り返へして、
闘爭の火花を、散らすに、餘念がない。
爭闘の火花を、散らすに……

必然の音響

國と國との戰ひが開かれる時、
國と國との交渉が斷たれる時、
互に取り交はされた使臣は、人民は、
その戰ひの開かれぬ——前に、
必ず引揚げる、

俺とお前の、交渉の斷たれる時、

俺と、お前の距りが出來た時、
俺と、お前の距りが大きくなつた時、

俺と、お前の間に、架けられた橋は、

俺と、お前の距りが大きくなつた、
その時、その瞬間、そこに架けられた橋は、

必然的に、音響を起てゝ落ちるのだ、
必然的に、音響を起てて落ちるのだ。

一九二三、三、九

涯下に巣喰ふ女

俺が、ある家の窓下を通ると、
燕のやうに、體をチラつかせ、
朧夜の月のように、微笑みを俺に投げつけて、
頻りに、俺を、呼び止める不思議の女があつた。

俺は、行先を急ぐので、
その呼ぶ聲は、姿は、
俺のハコブ足を遲くはした。

俺は、用事に急がるゝ儘に、遂にその聲も、姿も振り棄てゝ、
統一のない體を、嵐の前の豫覺のやうに、用事を忘れ兼ね、
脚を早めて、行き過ぎようとすれば、
幾脚か歩みを過ぎた時、その時、どうしたことか、
不思議の女は、
今の今迄、今の今迄笑つて居たのが、笑つて居たのに、
彼女は突然、聲ををろ〳〵慄はせながら、
唇の色は蒼白に、全身を慄せて、頻りに唇を食む、

唇からは血潮が流れ出る、血潮が流れ出る、

そして心臓を、チギリ出すよな聲を振りシボつて、

俺を呼び止める、俺を呼び止める。

俺の體全體を抱くやうな、

直感じを俺に與へた、

俺は、思はず身顫ひした。

然し急がる——用事のために、行き過ぎようとすれば彼女は、猶ほも身顫ひを續けながら、今迄と別な聲音を出した、

こんなことを打明けるのは、——お願ひするのは、

あなたに對して迷惑のことは、迷惑であることは、わたしは、承知の上で、お願ひするの、お願ひするのよ、

お願ひするのよ、

空はどんより雨模様、

愬へる聲は、俺の耳を刺し、

その姿は、俺の眼を射た、綜合した聲と、

姿は、俺の心臓を摑み出した。

暫くの間昏迷して居た俺は——身慄ひした。

ある強い、何者か、俺の、體全體を、押へつけた。
暫くして俺は、俺自身に歸って、急ぎの用事のことに、意識が甦った時、

俺は、大い溜息を漏しながら、斯うして居られぬこと〻自らと鞭打つて、地から生い出たやうな、
脚を、體を、
全身の意力を盡して、
引拔くように、よろめきながら、
一足、二足歩み出せば、
彼女は、悲鳴を揚げて、

開け放してある窓に、斜めに體を倒した、

晩秋の虫の聲に似た、聲を、姿を、
頻死の様を、俺に投げつけて、
今は息も絶え、絶えに、愬へるその姿さへ。

太陽は照り輝いて居たのに、急かに颱風を持ち來たし、四邊一面に、眞白な、霜を置いた、

電燈の滅した後のやうに、
俺の行く先を暗くした、俺の體全體を、魂を

全く闇黑の中に投げ込んだ、
そして時々、
俺の頭上に、雷鳴を導いた、

俺の、視神經を電波で威嚇した、俺を一歩も歩ませない、一歩も足を運ぶことを許さなかつた。

俺の、體を、意識を、鐵鎖で繋いだ、

俺は、全く意識を失つてしまつた、

夢か……幻影か……

俺は殆んど、無意識的に、……

彼女に答へた……

その時、その瞬間、彼女は異様の聲をあげた、

一顫ひ身振ひしたら……

……

今の今迄、萎えた彼女の聲は——姿は、

今の今迄、頻死の狀態にあつた、彼女の姿は、光より速く、異常の力をもつて、

不思議にも、フヒエルムの脱殼より速く、鮮かに、

瞬間的に、……。

俺の嘗つて見たこと、想像したことのない程の綺麗な姿に變つた、

綺麗な姿に變つた彼女の姿は、聯繋してある綱引くように、

俺の全身の血を躍せた……

暫く間、俺の全身の血を……

黑く鉛のやうに塊めた彼女は、

……俺の血を、眞赤に、眞紅に燃やした、心臓を躍せた。狂喜させた。

その瞬間、その瞬間に、

彼女は、不思議にも俺の知らぬ間に、

俺の心臓の血液を舐め盡した。

俺の、心臓の血液を一滴も殘さず舐め盡した……

俺の心臓の血液を一滴も殘さず舐め盡した不思議な

彼女は、

俺の顔の、蒼白を……

あざけりながら……

窓を、ヒヽヤヽリと激しく音を……

最後に……

姿を消した……

姿を消した……

——一・九二三・三・七——

濕地の火 終り

出版書目錄御申越次第呈上

大正十二年五月十五日印刷
大正十二年五月二十日發行

【定價金壹圓參拾錢】

濕地の火

譯者　新島榮治

發行者　東京市京橋區北槇町十一番地　前田隆一

印刷者　東京市牛込區早稻田鶴巻町一四一番地　吉原良三

發行所　東京市京橋區北槇町十一番地
振替東京三三一六番　紅玉堂書店

牛込　康文社印刷所　早稻田

版權所有

長崎高等商業學校教授 文學士 浦瀬白雨先生譯

現代英米詩選

定價壹圓五拾錢 送賞八錢

新刊

英米の詩人二十八氏の作品のうちより、その人の個性と特色が充分に現はれてゐるものを輯む、著者の苦心になる譯は讀む人に、充分の感銘と便益とを與へることと信ずる。

續刊書

近代獨逸詩選　進藤延譯

現代ロシア詩選　若目田三郎譯

現代佛蘭西詩選　加藤悠譯

勝田香月著及畫　菊半載二百五十頁　口繪函入美本　定價金一圓二十錢　送賞八錢

抒情詩集

さびしき人々へ

涙ぐましい詩集！　さびしい詩集！　愛唱すべき詩集！

著者は自序の最後にかう述べた……

まことに孤獨は我々の運命である。

此處から反抗も出發する……と。

◆現代青年子女の愛すべき詩集◆

詩集 哀別

勝田香月著

この一卷の詩集は私の苦痛と悲哀と煩悶寂寥と反抗とに彩られた青春の日の最後の記錄である。私の青春への哀別の贈りものである。

菊半截二百五十頁
紙裝幀破美本 定價一圓二十錢 送費六錢